どうして日本人は相互協調的に振る舞う人を評価するのか

○中川亜希子[1]・橋本博文[1,2]
（[1] 安田女子大学心理学部心理学科 [2] 安田女子大学発達・臨床心理研究所）

目的

文化に特有とされる心や行動はなぜ示されるのだろうか？本研究の目的は，これまで日本人に特徴的であると議論されてきた相互協調性（Markus & Kitayama, 1991; 2010）に着目し，相互協調的と形容される行動は,（日本人個々人の選好の反映というよりもむしろ）公的な状況における他者への表明行動として示されることを明確にすることにある。

日本人に特有とされる相互協調性を個人的選好としてではなく，あくまで他者からの好意的な反応を得るための戦略として理解しようとする研究として，橋本（2011）の研究が挙げられる。橋本（2011）の研究では，日本人個々人は協調的な心のあり方を有しているわけではないが，協調的な振る舞いこそが他者から好意的な反応を得ると互いに予想し合う結果として，協調的に振る舞い合っている可能性を議論している。しかしこの議論では，そもそもなぜ協調的な行動を人々が好意的に評価すると予想しあうのかという問いに対する明確な答えが提出されていない。本研究ではこの問いに対して，協調的な行動だけでなく，「協調的な人物を好ましいと評価する」という行動も同様に，公的な状況における他者への表明行動として理解できる可能性を検討する。より具体的には，協調的な人物を評価すること自体が他者から評価される状況において，人々は協調的な人物をより評価するようになるとの仮説を検討する。

方法

分析対象者　安田女子大学の学生 80 名。

実験条件　自身の評価それ自体が他者から評価される恐れのある条件（以下，パブリック条件）と，他者からの評価を気にする必要のない条件（以下，プライベート条件）の二つの条件を設定し，各条件において，独立的に振る舞う人物と協調的に振る舞う人物のどちらをより好ましく評価するかを尋ねた。それぞれの人物については，橋本（2011）と同様に紹介文を提示した。より好ましい方の人物を選択させた後に，協調性尺度（Hashimoto & Yamagishi, in press）やデモグラフィック項目にも回答を求めた。実験中の行動は 7 桁の整理番号によってのみ処理される点を強調し，回答の匿名性を保証した。

結果

仮説の検討　条件（パブリック・プライベート）間に選択行動（独立的・協調的人物）のちがいが示されるかどうかを検討するためカイ二乗検定を行ったが，有意な差は示されなかった（$\chi^2(1) = 0.50$, n.s.）。

追加分析　パブリック条件において，協調的な人物を評価する選択行動と，個々人の協調性の程度の関係を事後的に分析するため，パブリック条件における選択行動を従属変数，協調性尺度のうち排除回避の協調性を独立変数とするロジスティック回帰分析を行った。その結果，排除回避の協調性の効果が有意であった（Wald $\chi^2(1) = 4.45$, $p < .05$.）。この効果は調和追求の協調性を独立変数とする同様の分析では有意な効果が示されなかった（Wald $\chi^2(1) = 1.79$, n.s.）。

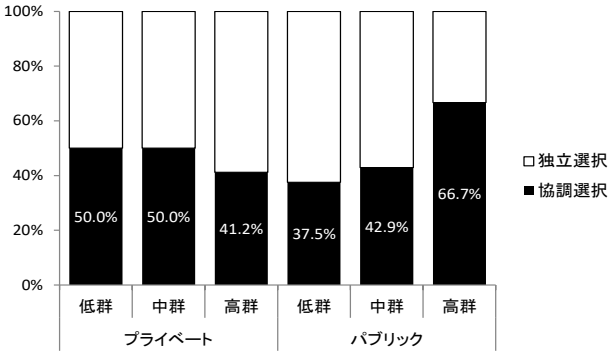

図 1 条件ごとの選択率（排除回避傾向低群・中群・高群）

考察

条件間に選択行動の差異が示されなかったため，協調的な人物を評価するにあたって，他者から評価される状況が効果を持つとする本研究の仮説は支持されなかったといえる。しかし，個々人の協調性を測定する尺度のうち，排除回避の協調性尺度の得点のみがパブリック状況における協調選択に効果を持っていたという結果（図１）は示唆に富む結果である。この結果は，協調的な人物を評価するひとつの理由として，他者から嫌われるのを避ける心理が働いている可能性を示唆するものである。